

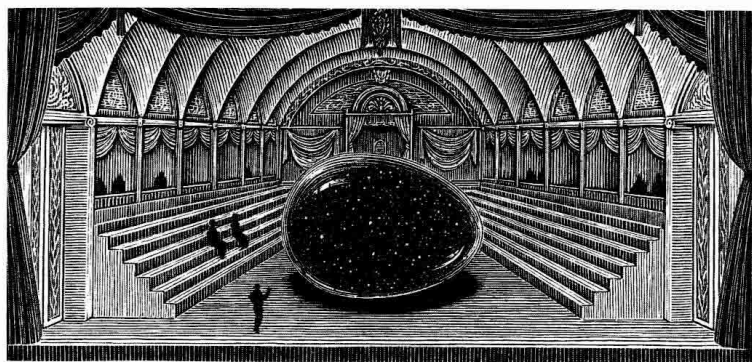
望郷のオペラ

松井邦雄

大興出版



望郷のオペラ



松井邦雄

六興出版

望郷のオペラ

昭和62年 8 月10日 初版印刷

昭和62年 8 月15日 初版発行

著者 松井邦雄

発行者 賀來壽一

発行所 株式会社 六興出版
〒112 東京都文京区水道 2-9-2
電話 (03) 943-3431
振替 東京 1-92448

印刷 共同印刷株式会社

製本 大日本製本株式会社

©1987 Kunio Matsui
ISBN4-8453-7154-5 C0095

望郷のオペラ
目次

序曲 — サンテルモの灯

7

第一幕

ジェリコ、またの名を夢買い

17

夜ごとの美女

37

第二幕

雪の上の舞踏

57

海峡の眺め

83

〈間奏曲〉

107

第三幕

スピードの女王

月光とギロチン

153

第四幕

夕日に赤い帆

177

裸足の伯爵夫人

205

終曲 — コンドルの空

231

註

243

あとがき

259

裝幀
插畫

柄澤
齊

望郷のオペラ

夜会に遅れれば遅れるほど、客は美しくなる。

ベンヤミン「ベルリンの幼年時代」

サンテルモの灯



寝台特急「^{インデペンデンス}独立号」は北を指してひた走る。

窓の外は鼻をつままれてもわからない真つ暗闇、たまに通過する駅の裸電燈が、日干し煉瓦の小屋とねじくれた灌木の姿をほんの数秒ぼんやりと映し出すだけだ。

私は、「母をたずねて三千里」のマルコの道筋をたどって、南の首都から北の街へのぼる途中だった。発つときはコートに厚手の上衣だったのが、北上するにつれて気温があがり、北の街へ着いたときはポロシャツの袖をまくりあげていた。

先刻から隣りでジャガーの低い唸り声のような^{いびき}軀がしている。プリモ・カルネラのような巨漢が布袋腹の上で両掌を組みあわせ熟睡しているのだ。

私は窓を透かしてジャガーの潜^{カグチン}んでいそうな暗闇の原野に目を凝らした。駅の明りが照らす木立に仙人掌が混るようになり、私は上衣を脱いで窓際のフックにかける。南半球では北は「南」なのだ。

半袖のTシャツを買い、汗をふきふきジャカランダの花が咲く真冬の北の街を歩く。マルコはここから二十五キロも離れた砂糖工場のある街へ母をたずねて歩きつづけたが、南の首都からジャカランダの街まで、すでに千三百キロ近くを歩いての上である。独立広場のベンチに腰をかけて私は地図をひろげた。マルコと母が再会したはずのその街の名前は見当らなかった。人影がするので目をあげると、三人の子供をつれた物乞いの女が皺だらけの手をさし出している。断わっても立ち去ろうとせず、三人の子もいっしょになって金を請求する。物乞いの女は早口でまくしたてながらなおも粘ったが、私に応ずる気がないのを見るとひと声鋭く、「何故？」と叫んだ。赤銅色の顔の奥の黒い目が異様に光っている。子供たちも「何故？」の唱和をはじめ、私は早急に退散した。

「何故？」

「なぜ？」

そう、なぜ私はここにいいのか。それが私には答えられない。

ジェノヴァの十三歳の少年マルコは、遠い異郷の母に会うために山河を越えてひとり旅をする。三年前、私は地中海のある港町で、マルコが新大陸へ上陸した「アンド

レア・ドーリア」という船の名を刻んだ小さな真鍮のプレートをみつけた。私はそれをお守りにして、マルコの歩いた陸路をたどってみることにしたのである。

マルコが何十日もかかって踏破した荒野を、私はひと晩でまたいでしまった。害獣や毒虫やもつとおそろしい追剥ぎの出没する前世紀の荒地を、少年はひとりで渡り切った。疲れ果てたマルコは、オンブーの樹の根方で死んだように眠っている。その寝顔をじつとのぞきこんでいるのはこの地の聖獣ピューマだ。ピューマが不屈の少年の守り神だった。「アンドレア・ドーリア」が私の守り神だったように。もともと私の一夜の添寝の友は、ジャガーのようないびきをかくブリモ・カルネラだったが。

私は北半球の極東から南半球の南緯三十四度まで一昼夜かけて真逆様に落ちてきて、今度はひと晩かけて北へのぼって行った。北半球の真夏は当地の真冬であり、真冬の首都から北へ、南回帰線に近づくにつれて空気は湿って熱くなった。私の体内磁石は機能を失い、自分がいま、いったいどの季節のどこへむけて動いているのかおぼつかなくなつた。

北へむかうにつれて「南」になるといふのはふしぎな快感だった。それは私に、三十年以上も前の北方の都市での、間歇泉のような祭りの愉楽を思い出させた。北へむ

かえばむかうだけ、まちがいなく気候も生活もきびしくなるのに、私は王者のように寛闊な祭りを主宰することができた。

北の街で夢みていたのはつねに南だったが、いままさに北をめざしながら、私の肌は次第に南の熱風に灼かれつつあるのだった。

「独立号」
インデペンデンス

の水の出ない巨大な水洗トイレにまたがったとき、私の尻に吹きつけた一陣の風は、北方の街で暮したころ大便所の下から吹きあげてきた、筆舌につくしがたい異臭のこもった寒風を思い出させた。

戦後すぐ、自分の体より大きなリュックに米を詰めて、マルコのように長距離を往復した。堅い石炭臭い木の座席に腰かけて、しっかりとリュックを抱きかかえたまま、移りすぎる景色に目をやっていった。目に入るのは立ち枯れた樹木やひしゃげたバラックばかりで、空はいつも鉛色だった。

支線から山をひとつ越えたところにある田舎の家の薄暗い電燈の明りの下で、真珠色に輝く炊きたての米のめしを口に入れたとき、そのうまさに我を忘れた。それはアリババがみつけた無尽蔵の宝の山と見えた。ひと粒かむごとに甘露がつぎつぎに口の中に湧き出して、ひたすら餓鬼のように貪り食った。

私は何度も頭をさげ、礼をいい、山をひとつ越えて支線の駅までたどりついた。肩に食いこむリュックには、至上の宝がぎっしり詰っていて、私は幸せの重さに呻いたのだ。家庭の幸福が諸悪の本と^{もと}呼ばれるには、食べものが手の届くところにおりてくる必要があった。バラックは安普請の一軒家に、家庭菜園の茄子畑はダリアやパンジーの花園に、いつのまにか姿を変えて行った。

大病の予後のすこし面映ゆい恢復期のような一時期を私は北緯四十三度の北方の街ですごしたのである。それからまもなくして、私たちは宿病ともいふべき奔馬性の躁病に、一、二の三で飛びこんで行くのであるが。

ラ・プラタ河の首都は美しく衰弱している。

マルコがジェノヴァからやってきた百年以上前、この街は牧畜景気に沸く新開地だった。マルコが降り立ったボカの埠頭では、船乗りや沖仲仕や娼婦が荒っぽい気晴しをやっていた。かれらは焼酎を[あおり](#)、古拙なお囃子にのせて波止場のいしだんみを踊り狂った。

半世紀前にこの街は絶頂に達し、それっきり足をとめた。あとは目を半眼に閉じて、

うつらうつら昔の思い出を愉しんでいる。だから、いま、深夜のサンテルモ地区にこだますのは、亡霊たちの夜会のさんざめきだ。けれども、いまやこの街そのものが旧大陸の思い出、黄金時代の思い出と化しているのであれば、ここに群れ集う旅行者が、失われた熱狂探しに血眼ちまなこになるのも無理はない。あの盲目の詩人が「熱狂都市」と名づけたこの土地の余熱は、いまでもタンゴ酒場をはしごする旅行者の踵かかとを火傷やけどさせずにはおかないのである。

私の住んでいた北方の都市も、この南半球の首都とおなじようにだだっぴろい平原の中に切り拓かれた新開地だった。ラ・プラタの首都は移民が作りあげたが、私の街は故郷を捨てた夢想家の集落からはじまった。ヨーロッパまがいとアメリカもどきのちがいはあるにせよ、それははじめから土着や伝習とは縁のない、根無し草の都市だった。帰るべき家をもたない流れものは急速調のミロンガに我を忘れ、家郷を忘れる。首都を去る前日、Nが夢枕に立った。

Nは北方の街で私が数年間、起居をともしした相棒だ。

Nと私は一時期、メダルの裏と表のように、あるいはお神酒徳利のようにつるんでいて、それはあわせてやっと一人前ということにすぎなかったにせよ、切っても切れ

ない相方だったのだ。

三十数年の間に、私たちの世界はすっかり面変わりしてしまったが、夢枕に立ったNは、マルコの兄貴のように生き生きと若々しかった。

Nは昔と変わらない人なつこい笑いを浮かべて話しかけてきた。

——どうかね、調子は？

——まあまあだよ。

Nは進駐軍放物資のバザールで買った、明るい卵色のツイードの上衣を着ていた。中古品で買ったときに相当よれよれだったはずが、染みひとつない新品に見えた。

——しばらくだね。どうしてる？

——ご覧の通りさ。

Nはゼペットじいさんに切り出されたばかりのピノキオのように、ぎこちなく、手足をあげさげしてみせた。

——どうだい。まだ油は切れてないだろう。

得意気に肩をそびやかし、ポケットからゴールデンバットを出して私にすすめる。

私が断わると、